

寺田寅彦と千駄木の漱石邸

山田 功

突然ですが、あなたがどうしようもない寂しさに包まれた時、どうしますか。河島英五は次のように、歌っています。

忘れてしまいたい事や	飲んで飲んで飲まれて飲んで
どうしようもない寂しさに	飲んで飲みつぶれて寝むるまで飲んで
包まれた時に男は	やがて男は静かに寝むるのでしょう
酒を飲むのでしょう	(以下略)

「酒と泪と男と女」 作詞・作曲・歌 河島英五

酒を飲まない 26 歳の寺田寅彦は、どうしようもない寂しさに包まれた時、夏目漱石先生の家に出かけました。では、寅彦のどうしようもない寂しさとは何だったのでしょうか。

22 歳で寅彦は東京帝国大学理科大学物理学科に入学しました。翌年春、本郷区西片町に家を借り、熊本五高時代に結婚をしていた妻夏子と呼び寄せ、新しい生活を始めました。しかし、その年の暮れ、夏子は咯血。当時、死の病と恐れられていた肺結核です。早速夏子は保養のため郷里高知へ帰ることになり、寅彦は一人下宿生活を始めるのです。二人での生活は 1 年にも満たなかったのです。そんな状態でしたが、二人の間には長女貞子が誕生します。

大学が夏休みに入った 6 月、寅彦は早速夏子を見舞い、子どもに会いに帰省をします。しかし、9 月、上京直前寅彦は、肺尖カタルとの宣告を受け、しばらく大学を休学し、須崎で療養に入ります。妻夏子と別れての生活です。子どもは寅彦の実家で養われます。およそ 1 年の療養でなんとか健康を取り戻した寅彦は東京に戻り、大学での生活を再開します。

そんな 11 月、夏子の死亡の知らせを受けるのです。11 月 16 日の日記にはこう書かれています。「昨夜会より帰りて床に就かんとする頃、胸さわぎ一しきりしたるが恰も夏の臨終の刻なりしと思合はされたり。此朝第二の電報の未だ来ぬ前、暁の鴉夥しく屋根に鳴き騒ぎたり」。物理学を専攻している寅彦でも、妻夏子臨終の刻に胸騒ぎや鴉の鳴き騒ぎに不吉を感じています。それ程に心配と不安を持つ毎日であったのでしょうか。

慌ただしく高知で葬儀を済ませ、一人東京に戻った寅彦は、どんな思いで暮らしたのでしょうか。五高時代親しく英語や俳句を教えてもらった漱石先生は、英国へ留学中です。高校時代からの友人、間崎純知は、当時のことを次のように書いています。「寺田は淋しくてたまらぬものですから天気が悪いと言ってはやって来る。風が吹くと言ってはやって来る。

こんな日に何故やって来るのだときくと、来たくなかったからやって来たといふのです。それで酒をいくらものまぬ寺田と、竹崎とわたしとは二人で一升以上ものむというような変は取り合せの三人が出掛けるのですが、よく三人で青木堂へ行きました。我々二人は青木堂でチョコレートなどを飲むのは閉口なのですが、青木堂をつき合って置いて、次には本郷三丁目裏のやぶそばへ行って酒をのむのを寺田がつき合ふという段取りです。(略) 青木堂からやぶそばへ廻って、竹崎とわたしが大いに飲む。傍で二三杯で真赤になった寺田は、この時だけは憂いを忘れたように、我々の元気溢るる馬鹿騒ぎを見てみました。酒を飲んだり、暴れたりしてゐる仲間と一緒に時だけ苦しみを忘れていたのでせう。雨や雪の降る天気の良い日にぐちょぐちょにぬれて現れる寺田の姿を今でも時々思い出します。」
〔『回想の寺田寅彦』 小林勇編 岩波書店 昭和 12 年〕

翌、明治 36 年 1 月 24 日、漱石が英国より帰国をします。事前に帰国日を漱石の奥様に問い合わせ、新橋に出迎えに行きます。出迎えは、家族の他は寅彦だけであったといひます。そして翌日にはもう漱石を訪問するのです。どんなに先生を待ち焦がれていたのかわかります。漱石は 2 月 13 日、帰国後しばらくいた中根家をでて、千駄木の借家に移るのです。そして、寅彦の頻繁な訪問が始まります。寅彦の日記を見ると、3 月は 4 回、4 月は 5 回、5 月は 4 回、肺尖カタルになった 6 月は 3 回といった調子です。

『夏目漱石先生の追憶』には、こんなふうに書いています。「千駄木へ居を定められてからは、また昔のように三日にあげず遊びに行った。その頃はやはりまだ英文学の先生で俳人であっただけの先生の玄関はそれほど賑やかでなかったが、それでもずいぶん迷惑なことであつたに相違ない。今日は忙がしいから帰れと云われても、何とか、かとか勝手な事を云っては横着にも居すわって、先生の仕事をしている傍で『スチュディオ』の絵を見たりしていた。(略) 色々な不幸のために心が重くなったときに、先生に会って話をしていると心の重荷がいつの間にか軽くなっていた。不平や煩悶のために心の暗くなった時に先生と相対していると、そういう心の黒雲が綺麗に吹き払われ、新しい気分で自分の仕事に全力を注ぐことが出来た。先生というものの存在そのものが心の糧となり医薬となるのであつた。(略)」(『寺田寅彦全集第 1 巻』 岩波書店 1996)

寅彦は、運動が得意でもなく、どちらかといえば神経細やかな若者でした。五高時代は、寮生活に馴染めず早々に下宿生活に入りました。その本当の理由はわかりません。そんな寅彦が寂しさに必死で耐えていたことを思うと、私は心が震え、胸が痛むのです。

千駄木の漱石邸は、まさに教会のような心の安らぎを得る大切な場所であつたことが分かります。その建物は関東大震災でも、第 2 次世界大戦の空襲でも被災をせず残りました。東京都の文化財にも指定されました。しかし、東京都は保存することができませんでした。今それは愛知県犬山市にある博物館「明治村」に『森鷗外・夏目漱石住宅』として、保存されています。先日も久しぶりに明治村に出かけ、そこを訪ねてきました。少しそれを紹

介します。

建築家谷口吉郎は、昭和 15 年、明治の記念碑的建物「鹿鳴館」が消えてなくなるのを見て、これは惜しい、博物館にでもして保存できないかとある新聞に書いたそうです。そこで、四高時代からの友人である、当時名鉄副社長の土川元夫に相談をしました。消えゆく明治の建物を残そうとの思いが一致し、名鉄が用意したのが愛知県犬山市入鹿池の近くの丘陵地 15 万坪でした。今まさに取り壊され、消えようとしていた全国の貴重な明治の建物がここに移築され、昭和 40 年 15 棟の建物で、「明治村」は開村をしたのです。現在では重要文化財 11 棟をはじめ 60 余棟の建物や多数の記念物をもつ、れっきとした博物館になっています。最近東京駅が、元の姿に復元されました。その駅前に当時建てられた「東京駅警備巡查派出所」が明治村にあります。東京駅を思わせるデザインのレンガ造りです。今となればとても興味深い建物です。

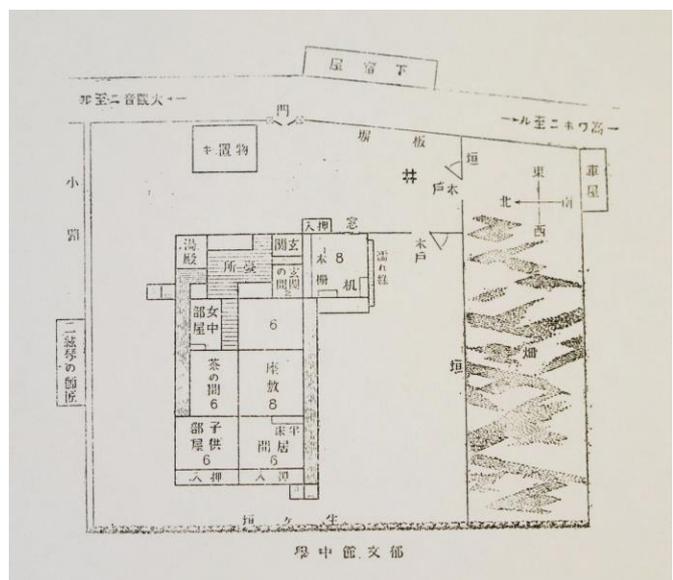
さて、『森鷗外・夏目漱石住宅』を紹介しましょう。それは、明治村正面入り口、真正面の小高い山の上に、木々に囲まれ静かに立っています。正面入り口からまっすぐには行けませんから、学習院長官舎と西郷従道邸を回っていかねばなりません。

それは明治中期の極ありふれた 39 坪の平屋住宅です。明治 20 年頃、医学博士中島讓吉の住まいとして、本郷区千駄木町 57 番地に建てられたものです。しかし、中島は住むことなく、人に貸すことになりました。そこに鷗外が 1 年ほど住み、その後英国から帰国した、漱石が借りることになったのです。

当時の漱石邸の様子は、夏目鏡子述、松岡讓筆録の『漱石の思ひ出』（岩波書店 昭和 4 年）を読むとよくわかります。書斎は、玄関脇の南に飛び出した 8 畳間で、玄関の間からの入り口は書棚でふさがれていて、いったん廊下まで出て、3 尺の戸を開いて中に入ること。大きな机は、南に向けて据えていたこと等がわかります。家の見取り図をこの本から紹介をしておきます。

ご存知『吾輩は猫である』は、ここで書かれました。従って、この家が小説の舞台になっていることがここに来るとよくわかります。実際に泥棒にも 2 度も入られたそうです。生垣の向こうには、郁文館中学があり、北道路を隔てて二絃琴のお師匠さんの家もありました。

明治村にある「千駄木の漱石邸」は、中に入ることができます。東側の玄関から入りましょう。寅彦もこの玄関から入ったでしょう。挨拶をすると、右側の台



所から女中(今ではこの言葉は使わない)が出てきて取り次いでくれたのでしょうか。玄関土間には、ふたつの大きなタイル板がはめてあります。この上で靴を脱いで、上にあがります。2畳の「玄関の間」の左側が書斎です。そこの襖を開けて入れますが、当時は大きな書棚がそこを塞いでいましたから、「次の間」を通り、縁側に出て入ります。『吾輩は猫である』にもこう書いています。「「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書斎の開き戸を明けて顔を出す。」開き戸は、縁側の方にあるのです。8畳の書斎に入ります。ここで、漱石は、講義の準備をし、原稿も書き、絵を描きなどをしていたのです。中央の座敷机の前に座ってみました。寅彦が心の安らぎを得た部屋です。北側に大きな書棚があります。書棚には、残念ながら今は漱石に関係のある本は一冊もありません。南は、ガラス戸が開けられています。外の木々の葉が緑の光を放っています。濡れ縁を前に作りものの猫が座布団に座り来客を見つめています。南西の角に明り取りの窓があり、下は戸棚になっています。この角に大きな机を置いていたと鏡子夫人は言っています。『吾輩は猫である』にも大きな机が出てきます。「長さ六尺、幅三尺八寸高さ之に叶ふと云う大きな机である」と。

静かに仕事をするにはちょうど良い場所であり、落ち着ける広さの書斎です。先生の仕事する傍で、寅彦は本棚から画集を取り出し見ていたのでしょうか。時には会話もいらなかったのです。先生の傍



玄関



書斎（大きな机を置いていた場所）



庭から見た書斎

にいただけでもよかったです。

座敷は「次の間」の奥です。縁側があり障子を通して、柔らかな光が入ってきます。来客の応対はこの座敷で行われたのでしょう。しかし、寅彦は書斎に入り込んでいます。これからもよほど親しい関係とみてよいでしょう。座敷の北側が『吾輩は猫である』にも良く出てくる茶の間です。台所からは、中廊下を通り入れます。建築家は、これを各部屋の独立の始まりと書いています。

外から眺めると、南に張り出した書斎と長い縁側が目に着きます。張りだした書斎は、後の洋式応接間へと変化していくのでしょうか。縁側は、今では懐かしいところになってしまいました。昔は外からきた人がちょっと腰かけ、お茶を飲みながら、話をするところでした。また、針仕事をしたりする作業場でもありました。日の光や、雨が直接部屋へ入らない効果もあります。部屋でもない外でもない、あいまいな空間があったのです。私も縁側に腰掛けてちょっと一服しましょう。庭には春、カタクリが花いっぱい咲かせます。

この「森鷗外・夏目漱石住宅」は、二人の文豪が住んだというだけではなく、寺田寅彦にとっても忘れ難い貴重な建物であるのです。



座敷（奥は夫婦の部屋）



庭から見た座敷（縁側が見える）



「森鷗外・夏目漱石住宅」全景